

2019年9月

聖句随想・折々の言（ことば）

「今、二人のアナニアから学ぶ」

牧師 森 言一郎

ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。

（使徒言行録 9章10節）

聖書には二人の「アナニア」が登場します。いずれも使徒言行録に出てくるのですが、一人は5章1節以下に出てくる、エルサレムに暮らす「アナニア」です。彼は妻のサフィラとともに献金額をごまかし、神をあざむいた人として描写されます。

先ず、アナニアが、続いてサフィラが、それぞれ神に裁かれ、息絶えた夫婦として紹介されている

のです。新約聖書の中でも実に後味の悪い記事のひとつだと思います。

*

しかし、少し見方を変えると、これは初期のキリスト教徒の暮らしぶりを伝える貴重な記録とも言えます。

なぜなら、彼らの死の直後に使徒言行録の中で初めて「教会」という言葉が使われているからです。おそらく、キリスト教会は、誕生して間もない頃から、貧しい人々の必要を満たしながら、どうしたら共に生きることが出来るのか、という現実の課題と向き合っていたのです。

*

そうした切実な事情を背景にして生じた、〈あざむき〉と〈貪欲〉の罪は、教会というものの本質への重大な挑戦でした。この不幸な事件は、復活の主のいのちに生きるために、どれほど

自分自身との戦いが求められているかを考える切っ掛けとなったのです。このような教訓を、私たちも、アナニアたちの生きざまから学ぶことが出来ます。

*

も う一人の「アナニア」は使徒言行録 9 章に登場します。今回はこの人について深く思い巡らしていきます。

このアナニアについては、使徒パウロが、掛け替えのない出会いを与えられた出来事を振り返って、最後のエルサレム滞在中の説教の中でこう紹介しました。

使徒言行録 22 章 12 節以下ですが、【ダマスコにはアナニアという人がいました。律法に従って生活する信仰深い人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人の中で評判の良い人でした。】と語ります。

さらにアナニアは、【今、何をためらっているので

す。立ち上がりなさい。その方の名を唱え、洗礼を受けて罪を洗い清めなさい。』】とパウロに勧めたとあります。自分はアナニアから洗礼を受けたことを証ししているのです。

*

律法に従って生活する信仰のあつてのアナニアと紹介されるということは、元来この人物は、熱心なユダヤ教徒だった、ということです。

しかし何らかの導きによってイエス・キリストの道を生きるようになったアナニアは、キリスト教徒の迫害のために息を弾ませていたサウロたちからすれば、早いうちにこっぴどい目にあわせる必要がある要注意人物でした。

ユダヤ人の風上にも置けない立場にあったアナニアは、最初の殉教者となったステファノ同様、石で打ち殺されるかも知れない状況にあった人、ということになります。

*

も ちろんアナニアは、エルサレム近郊で大暴れしていたサウロらが、ダマスコに近づいて来ている情報をもっていました。

ところが、アナニアが見た幻の中に現れた復活の主は、なんと彼にこう語ったのです。

「『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロを訪ねよ。彼は今、あなたが来て手を置いて祈ってくれるのを待っている。彼も幻を見たのだ………」と。

*

➤ の箇所、文語訳聖書では「視(み)よ、彼
☪ は祈りをるなり」という言葉を読むことができます。実はこれが原文に忠実な訳なのです。

これを、わたし流に意識すると、「アナニアよ、あなたはサウロに出会わなければならない」という

命令形の言葉になります。アナニアに、サウロの元に赴くことに対する躊躇(ちゅうちょ)がなかったはずがありません。そんな彼が「視よ、彼は祈りをるなり」という復活の主のお言葉を聴いてしまった。

主イエスとの邂逅(かいこう)はこのような形で起こるものなのです。

*

—— 方のサウロはサウロで、これまた複雑な気持ちで過ごしていたに違いありません。私が想像するサウロの心の声はこんな調子です。

「『あの道の者たち』に対してやって来たことは、さすがにやり過ぎだったかも知れない。そうだ、ステファノが執り成しの祈りをささげながら死んで行った時の驚きを私は忘れはしない。

男であろうが女であろうが構わず縛り上げ、牢獄

に入れ続けて来た私に、アナニアは悔い改めを求めるのだろうか。この先、自分がなすべきことが示される、と主は言われたけれども、いったいどんな顔をしてアナニアという人に顔合わせすればよいのだ。」

*

目が見えないまま 3 日間過ごしていたサウロの気持ちは決して晴れ晴れしていたのではありません。〈期待〉よりも大きかったのは〈恐れ〉でした。サウロは、目の前にやって来たアナニアの第一声を暗闇の中、固唾(かたず)をのんで待っていたはずです。

サウロの前に立ったアナニア。彼は、サウロの上に手を置き「兄弟サウル」と呼びかけたと記録されています。

*

私はこの「兄弟サウル」というひと言がすべてだったと読みました。このひと言によってあらゆるものが氷解したのです。これを語らせたのは神です。

その直後に、サウロの目に貼りついていた「鱗(うろこ)のようなもの」がポロリと落ちます。英語の聖書では「scales(スケールズ)」が使われる場合があります。

「scales」は確かに「鱗」の意味もありますが、元来「scale(スケール)」には「物差し・定規」の意味があることに注目したいと思います。

同世代の誰よりも、ユダヤ教徒として精進するために若い頃からエルサレムのガマリエルの元で修行し、先祖からの伝承に熱心だったサウロの絶対的な価値観を規定していたものが、一瞬にして目の前から消えたのです。

アナニアは〈使徒パウロ〉誕生のために助産婦の役目を果たした命の恩人とも言いうる人でした。

*

その後のアナニアは、ことある毎に、福音の使徒として働く、後(のち)のパウロのことを耳にし続けたことでしょう。

何しろ、新約聖書の中に 13 通の手紙が収められることになるほどの働きをしたのがパウロなのです。だとするならば、目から鱗が落ちたのは、この時のサウロだけではない。主のみ声に従い、立ち上がり、サウロの元に赴(おもむ)いたアナニアもまた然りでした。

*

—— 人の「アナニア」を巡る出来事は、キリスト者としての生き方、教会に繋がる者としてのあり方を、み言葉を通して私たちに對して問いかけて来ていることを思わずにはおれません。

日本という国の固有の歴史、すなわち、平成から令和に変わった今を生きる私たちの暮らしのただ中でも、形を変えて起こりうる何かが秘められているのではないのでしょうか。end